

報



會

會 岳 山 本 日

6

月 五 年 六 和 昭

「山岳」の記事

本會の機關雜誌「山岳」の内容をみると本欄雜誌を通じて登山紀行登山記録がその大部分を占めてゐる。紀行記録もとより結構である。狭いこの日本の國の中だけでも一生かゝつて登りきれない程澤山の山があるのだから、多くの人は日本國內の山でもその大部分は紙上登山でもつて満足しなければならぬのだ。だから「山岳」誌上に登山記の多いのは讀者にとつて嬉しい事なのである。

然し「山岳」誌上で取扱はれ得べきものは登山記以外にまだ／＼餘くないのではあるまいかと思はれる。ふい「山岳」を引張り出して讀んでみると近年は誌上に見掛けないやうな記事が時々收載されてゐるのに氣が付く。もちろん登山熱の振興が山岳會の大きな使命であつた昔と、登山が普及し過ぎたかの觀があり、また登山の形態の著しく變化してきた今日とは「山岳」に現はれる題材の自ら異なるのは當然過ぎる事であるが、なるほど以前はこんな記事の載つたこともあるのかといふやうなものな拾ひ上げてみるのも無駄ではあるまい。先輩達の手を著けた仕事を忘れないためにも、私達山に登るものの視野を廣くするためにも、埋れた寶物を世に再生させるためにも。そこで過去廿五年の「山岳」の中から氣のついたものを摘記してみる。

(イ)地質・地形に關するもの
山岳の成因に就て・小川琢治(一ノ

(一)日本アルプスと既往の水河・辻村太郎(六ノ三)山の生ひたち・同人(十二ノ一)山岳諸相・同人(十ノ四ノ一)火山の地形・大橋良一(六ノ三)日本アルプスと萬年雪の關係
小島烏水(六ノ三)山の形に就て・山崎直方(七ノ三)登山者の地質學素養・神保小虎(九ノ二)黒部川下廊下より得たる地形上の觀察・田中薰(二十三ノ一)北海道中央高地の地學的研究・小泉秀雄(十二ノ二及三)。
(ロ)湖沼研究
湖沼研究の趣味・田中阿歌麿(一ノ一)湖沼研究の一例としての箱根芦ノ湖(一ノ三及三ノ二)
(ハ)動植物に關するもの
高山植物の學術的研究・三好學(一ノ一)白馬岳植物採集案内・小川樂魚(三ノ一)稀有の高山鳥「やいのづぐみ」・内田清之助(六ノ一)高山植物に就きて・志村島嶺(七ノ三)高山植物の研究・武田久吉(十二ノ一)高山植物檢索便覽・同人(十三ノ一)日本の高山蝶・渡正監(十三ノ一)。
(ニ)寫真に關するもの
山岳寫眞・高野鷹藏(七ノ二及三)山地に於けるオートクローム撮影に就て・加藤精一(九ノ二)。
(ホ)氣象に關するもの
高處の氣象現象に就て・藤原咲平(十四ノ三)。
(ヘ)考證
山民の生活・柳田國男(四ノ三)百七十五年前の木曾駒ヶ岳登山記(五

ノ二)百十年前の富士登山記・笠間享(七ノ一)傳説及舊記に現はれたる赤城山・關口泰(七ノ二)隠れたる山岳研究家・牧量雅(八ノ二)山吹日記・關口泰(九ノ二)日本山岳史料・高頭式(十ノ一)武蔵通志山岳篇・河田龍(十一ノ一)雁ヶ腹摺考・武田久吉(十三ノ三)山に對して・別所梅之助(九ノ一)山と日本人と同人(十六ノ一)神流川雜案・高畑棟材(二十四ノ三)峠・大島亮吉(二十五ノ二)。
(ト)論説
甲斐山岳の形態美・小島烏水(二ノ三)日本北アルプス風景論・同人(五ノ三)山岳崇拜論・同人(八ノ一)繪畫の題材として山岳の出現・同人(八ノ二)上高地風景保護論・同人(九ノ二)祖國山川森林の荒廢・南方熊楠(六ノ三)森林濫伐と山川の荒廢・同人(七ノ二)山岳と哲學的精神・鹿子木員信(十ノ一)日川溪谷の濫伐と保護運動・武田久吉(十二ノ二)。
(チ)雪、雪崩に關するもの
高根の雪・山崎直方(一ノ一)乾燥雪崩・藤田信道(二十五ノ三)。
(リ)其他
山岳寫生に就て・大下藤次郎(五ノ一)目分量程度の測量・梅澤親光(五ノ一)第一回アルプス横斷飛行・福尾昇齋譯(六ノ一)。
以上は本欄のみに就て摘録したのであるがそれでも四十餘稿の多きに達し、記事の對象も多岐多様に亘つてゐる。

もしそれ雜錄欄にまで及ぶならば、更に多方面の記事を見出し得る。山案内の養成、ガイドブックの編纂、山岳語彙の蒐集などに關するものはもとより、傳説に碑を援へるもの、山名の考證を試みるもの、登山道徳を高唱せるものなど、實に興味深き記事は舉ぐるに遑ないほどである。

ところが近年に至つてどうもこの種の記事がだん／＼少くなつてきたやうな氣がする。山に攀づることそののみに、登山者の心が惹かれてゐるためなのであらうか。それとも「山岳」に寄稿されず、他の誌上に發表されることが多くなつたのであらうか。或はいつともなく論説や考證や研究が、「山岳」から遠去かつていつたのであらうか。又は「山岳」には「……」といふ謙讓から來たものであらうか。いづれにしても、私はもつと紀行記録以外のものが、誌上に發表される事を希望すると同時に、「山岳」に包容され得べき廣き分野の殘こされてゐることを想ふ。

また第六年第七年の頃行はれた野呂、田代兩川の分水嶺に就て、或は白峰三山に就てのやうな、甲論乙駁といふ議論も、遠慮なく行はるべきであると思ふ。どうも近頃の「山岳」は、窮屈な感じがしてならない。いまま少し、ゆつたりした氣分が欲しいと思ふ。

一九三一・四・三 藤島 敏男



社 神 山 雄 山 立

會務報告

四月七日定例幹事會

出席 評議員三名 幹事六名

- 一、五月七日大阪に於て開催せらるべき關西小集會へは角田幹事出張し「山小屋に就て」講演すること
- 一、法人申請手續遅延するやも知れざるを以て、先づ寄附行為案を骨子とせるものに會則を改むること
- 一、来る六月上旬東京に於て山岳講演會を開催すること
- 一、山小屋建設候補地新越乗越附近借入其他に就ては冠氏一任のこと
- 一、「山岳」第二十六年第二號原稿の締切は来る五月二十日とす
- 一、かねて計畫中なりし「ガイドブック」の刊行は明年度に延期す
- 一、本年度山日記は五月五日頃刊行

會計報告

昭和五年度收支計算報告次の如し

收入 四、二七四・五〇
 會費 四、二七四・五〇
 入會金 六三〇・〇〇

圖書室維持會費及寄附金

諸利息	五二〇・〇〇
廣告料	四〇二・四八
山岳賣却代	一六六・〇〇
山日記印税及雜收入	八一七・九八
前年度繰越金	一、五三三・六九
計	八、八五九・二八
支出	
山岳編輯印刷費	三、五一三・四三
借室料圖書室及集會室	九〇〇・〇〇
圖書購入費	三三七・七二
圖書室集會室設備費	二六〇・三六
事務及事務所費	四六三・二八
通信費	五五二・〇一
集會費	二〇二・〇八
人件費	一七七・一五
研究調査費	八八・九二
保險料及雜費	三六五・七七
次年度へ繰越金	一、九九八・五六
計	八、八五九・二八

退會者

昭和六年三月二十四日付
 (七七二) 京都市 成宮 良次
 同 四月十三日付
 (九〇) 東京市 大場 義人

「山岳」バックナンバー値下

會報前號に値下發賣のことを發表しましたところ會員各位より陸續と御申込がありまして、殘部僅少の號の内には遠からず品切になるものもある模様です。會員各位御入會後の缺號或は御入會以前の號などどしどし御申込下さい。5號に、改正定價表を載せておきました。代金は振替口座東京・四八二九・東京市芝區高

輪南町三〇日本山岳會宛御拂込下さると好都合で御座います。

山日記の會員割引に就て

5號發表の通り、一九三一年版山日記の發行は五月上旬と決定致し、會員割引は左記の規定に依ります。一日も早く御申込下さる様會員諸氏へ御願申し上げます。

定價 壹圓 送料一部六錢

會員二割引送料共八拾六錢

申込 五月十五日迄

申込先 本會事務所又は本會圖書室

備考 振替東京四八二九番を御利用願ひます。送金は申込と同時にのこと。申込期限後は一切割引致しません。

圖書室開室日當番

五月	十五日	鳥山
一日 藤田	十八日 角田	
四日 冠	二十日 浦松	
六日 木暮	廿二日 渡邊	
八日 横	廿五日 藤島	
十一日 松方	廿七日 藤田	
十三日 松本	廿九日 冠	
六月	十五日	浦松
一日 木暮	十七日 渡邊	
三日 横	十九日 藤島	
五日 松方	廿二日 藤田	
八日 松本	廿四日 冠	
十日 鳥山	廿六日 木暮	
十二日 角田	廿九日 横	

圖書室は右の日の午後五時半頃より開いております。市電虎ノ門停留場のすぐ前、二二屋ビルの三階三〇

七號室です。地階で簡単な食事も出来ます。本會所蔵の山岳幻燈スライドの整理も出来ました。いゝ時候です。會員各位の御來室を希望致します。(圖書室係)



社 神 山 三 父 秩

新着書目

The Geographical Journal, Feb / 1931	La Montagne, Jan-Fev / 1931
Die Alpen, März / 1931	Butletti del Centre Excursionista de Catalunya, Feb / 1931
The Prairie Club Bulletin, Mar / 1931	Appalachian Mountain Club Bulletin, Mar / 1931
J.O.C.H. 創刊號 慈惠醫大山岳部	日本地理大系 中部篇下巻 改造社
シリーズ 十九ノ三	RCC報告四號 RCC本部
日本地圖測量小史 高木菊三郎著	山嶺 四月號 東京野歩路會
旅行 同 東京旅行クラブ	岳友 同 日本岳友會
山行案内 同 昭和マウント俱樂部	

林と野の會々報 4	同上會
會報 2	日本登高會
登高 2	同
山彦 四月號	東京山彦山岳會
旅 同	東京アルカウ會
管見 錄	大阪管見社
會報 八ノ三	關東山岳會
山岳 創刊	戶畑山岳會
飛驒史壇 十ノ六	飛驒史壇會
會員本村鎮吉氏寄贈書目	
Alpine Skiing	A. Lunn
With Ski in Norway and	
Lapland by I. H. W. Fulton.	
阿蘇山の地學的研究	岩崎 重三
東遊記 橋南翁著	角田 政治
西遊記 同	有田 太郎
地盤 二ノ十二及三ノ一・二	同 尚榮堂發行
陸地測量新刊地圖目錄	
鐵道補入版(十三面)	
二萬分一地形圖 高知近傍14(家後)	
二萬五千分一 仙臺近傍1(小野)	
4(松島) 5(鹽竈)	
甲府近傍12(市川大門)	
奈良近傍9(櫻井)	
神戸及明石海峡近傍12(有馬)	
五萬分一地形圖 旭川1(石狩留邊志部) 6(富麻)	
京都及大阪2(京都東北部)	
松山11(長濱)	
五萬分一都市近郊圖 京都近郊	
二十萬分一帝國圖 岡山及丸龜	
修正版(九面)	
二萬五千分一 大分近傍1(家島)	

京都近傍6(京都東北部) 7(京都東南部)	
五萬分一地形圖 東京 3(東京東南部)	
松山14(室津)	
中津1(室津) 5(野島) 9(宇部東部)	
五萬分一朝鮮地形圖 鐵原9(洗浦)	
五萬分一地形圖 臺北5(富貴角)	
蘇澳5(濁水)	
一萬分一都市近郊圖 京都近郊	
三角及水準測量成果表(十五面)	
高田8(岩管山) 11(飯山) 14(高田西部) 熊本9(佐賀) 甲府13(高遠) 高山15(飛驒古川) 岐阜14(今庄) 飯田9(御嶽山) 宮崎13(紙屋)	
9(宮崎) 10(折生迫) 11(飯肥) 都井岬) 新潟10(津川) 富山13(宇出津、小口瀬戸)	
福岡山岳談話會	
四月十一日夜縣立圖書館樓上に於て第三回會合を行ひ、郷土史家木下讀太郎氏より大野山城の話の聴く。	
當日來會者十七名。	



北アルプスにスキーコースと山小屋の計劃	
常念小屋主人山田利一氏よりの通信によると、烏川登山口一の澤の奥に完全なスキー、ヒュッテを建設し又從來の常念、一の股兩小屋に大改造を加へ、次のスキーシーズン迄に完成する由。尙スキーコースは一の澤より常念へ、それより一の股を下り、中山乗越より二の股谷を下り、一の股を経て高地に到るものである。完全な冬季の使用を目的とした山小屋の多くなる事は喜ばしい。尙一の股小屋は六間四方二階建歐風丸木造りとなし、風呂、乾燥室も作る計劃である。	
又、横尾谷へ入る新しい林道の報告もある。一の股の十町程下流より横尾谷との尾根、丸山の鞍部を越ゆる林道は本年開通の豫定の由。	
立山案内人組合長の更迭	
立山の登山口芦峰寺の案内人組合長は佐伯曜光氏であつたが、今般選舉の結果佐伯八郎氏が就任した。	
新座澤 香草 芳ヶ平 濤崎 熊	
の湯 志賀高原 湯田中	
一月三日午後二時五十分發信越線にて上田へ行き、驛前の旅館に一泊翌四日(快晴)午前六時四十分上田發の温泉で眞田乗替へ土合迄行き更に遊澤行のバスを待つ間に連れになつた、大屋の寫眞屋さんと雪が少ないのでスキーを擔ひて鳥居峠を越へました。	

峠より上州側へ少し降つた所で遇然にも田部氏に回遇致しましたが山中の事とて非常に懐かしう感じました。	
古永井より近道を取つて正午頃新鹿澤の宮崎旅館に到着、既に先着の會員柳澤、辻の兩氏と合する事を得ました。	
五日(晴)終日練習	
六日午前十一時頃前記兩氏と降雪を冒して出發、田代を経て瀨懸驛に出で草津電鐵の御厄介になりて草津に至り更に香草温泉に向ひ、漸く午後五時半頃到着しました。	
七日(快晴)午前八時香草出發毒水附近よりアザラシを附け、芳ヶ平で一休みしてから一氣に濤崎へ登りました。	
峠の眺望は實に申分なく稀にみる快晴にて男體より苗場までの諸峰を全く手に取る様に眺め得る事が出來横手の南斜面をへつてから熊の湯への滑降は實に小氣味の好い骨頂でした。	
八日(雪)午前十時頃熊の湯出發平床、丸山を経て丸池のヒュッテに立寄り、杓打茶屋から下は非常に雪が少なく所々石が出て居るので止むなくスキーを擔ひて遊は素通り、湯田中の湯元旅館へは午後六時頃着、翌九日歸京致しました。	
一九三一、一、一〇 松本 善二	

なで困つてゐます。しかし小屋に人が居なくて静かな生活の出来るのが幸ひです。	
一九三一、三、二 島田 巖	
南駒より	
去る三月廿八日より四月四日迄南駒ヶ岳附近に積雪期登攀を試みました。中田切川奥の岩小屋を露營地として四月三日空木岳に登りました。中腹以上の積雪は北アルプスに劣らず、急谷のタルは全部雪に埋まつてゐました。一七〇〇米以上の谷底は短スキーの使用が出來ました。	
小池 文雄	
編輯後記	
九州の方へ旅行してゐて、前號の編輯は角田君の御厄介になつた。季節が悪いせいか、原稿の集りが悪かつた。もつと會報を利用せらるゝ事を御願ひし度い。殊に地方の會員からの通信を期待してゐる。	
英國のヒマラヤ登攀隊(カメット)は、四月の四日にグエニスを出發して愈々インドへ向つたさうだ。壯快な報道がやつて來るのも間近だらう。夏の山の混雜なうるさく思はれる人は、今が何よりの時季だらう。靜かて、山は一番美しい時だ。	
山日記も角田君の非常のお骨折で愈々出版される。昨年よりは遙かに立派なものが出來上ること、思つてゐる。	
昭和六年五月八日印刷 昭和六年五月十日發行	
發行所 日本山岳會	
編輯後人 浦松佐太郎	
(印刷室明則)	

美津濃の登山靴と リックサック

山行に最も大切な完全無欠の
アマハーモデルの登山靴やキ
スリングモデルリックサック
等常に豊富に取揃へてござい
ます。



登山靴 ¥10.00.....¥22.00

リックサック

¥3.50.....¥11.50

大 阪 淀 屋 橋
東 京 小 川 町 通
神 戸 元 町 通

美津濃

名 古 屋 大 須 門 前
京 都 四 條 大 通
大 阪 南 日 本 橋

全 編 新 稿

曆、自由日記欄
登山の注意
冬期登山、雪崩
服装と用具
登山衛生
山岳高度表
峠高度表
其他

東京神田駿河臺
北甲賀町四番地

梓 書 房

電話神田二七七五番
振替東京七八六四四番

五月十日刊行

定 送 料 價 金
壹 六 圓 錢

山小屋・山案内
登山日程表

山岳語彙

山岳文獻抄

氣象表、度量衡

地圖區劃一覽表

其他

山日記

編 輯 委 員
及 筆 執
(者 順音十五)

日 本 山 岳 會 編

一 九 三 一 年 版

至 自 昭 和 七 年 五 月 六 月

浦 松 木 角 藤 藤 榎 松 渡
松 佐 理 太 恒 道 男 夫 郎
邊 方 有 信 敏 吉 太 郎
漸 郎 恒 道 男 夫 郎